

土曜ミサ先唱者覚書

カトリック布池教会

1 始まる前に

ミサ前は、できれば1時間前、遅くとも30分前には着いているようにしましょう。何らかの変更のある場合もあります。特に普段と異なるミサの進行になることが予想される場合は、ミサ前に主任司祭に進行の確認をする時間を確保しておきましょう。

1.1 事前準備

1.1.1 内陣中央の札

内陣への立ち入りを禁ずる札が内陣中央に置かれています。これを先唱者席側の柵の陰に移動させます。

1.1.2 朗読台に『聖書と典礼』を置く

聖堂入口で、

- 『聖書と典礼』 2部 (うち1部は大きいもの)
- 「お知らせ」 (主任司祭以外の司式の場合は先唱者が読みます)

- 典礼聖歌集、(必要なら) カトリック聖歌集

を確保して下さい。祭壇横の朗読台に『聖書と典礼』を置き、最初のページを開いておきます。

1.1.3 朗読者・答唱先唱者の椅子

朗読台の左側、朗読者・答唱先唱者の座る椅子の有無をチェックしてください。特に結婚式が行われた後は、椅子が全て侍者の控える場所に移されていることがあります。その場合は、朗読者・答唱先唱者の座る位置に椅子を二つ移しておきます。ミサ終了後に再び戻す必要はありません。

1.1.4 香部屋に入る

香部屋のドア (祭壇の左右にあります) の錠が開いているかどうかチェックします。開いていれば、

- 柄付き献金袋 (緑) を 4 本出して、内陣の左右に 2 本ずつ置いておく。
- マイクを出す。
- 祭壇左側の香部屋のドアから入ってすぐにあるマイク関連の電源スイッチを入れる (メインスイッチだけ。他のスイッチ類は触らないこと)。

香部屋が開いていない場合は司祭が来るまで待ちます。

1.1.5 マイクのセット

先唱者席からやや祭壇寄りの辺りにマイクをセットします。これでミサ前の一通りの準備は終わったので、自分用のパイプ椅子を出して座り、朗読と答唱、共同祈願の内容に目を通し

(各部の中身や量を知っておくべきです)、共同祈願に関しては読む練習をしておきましょう。

1.2 調整

1.2.1 朗読者の手配

朗読奉仕者を探しましょう。朗読は典礼奉仕としてはもっとも基本的なものなのですが、誰にでも読めるとは限りません。過去に読まれた方がおられればその方をお願いするのが一番確実ですが、探し難い場合は、典礼委員の水野さん等に協力をお願いしましょう。

1.2.2 ミサ前の説明

ミサの始まる 5～7 分前に、会衆への説明を行います。聖歌に関しては聖歌隊のオルガニストが説明することになっていますので、基本的にはそちらにお任せすれば良いのですが、その日だけ使う聖歌集やプリントがある場合には、オルガニストの説明後に追加のアナウンスを行った方が良いかもしれません。

2 ミサ中

2.1 聖体拝領時のチェック

聖体拝領前のアナウンス後、先唱者席の扉を出てすぐの壁際に立ち、拝領の様子を見ておきます。手でホスチアを受けた後、その場でホスチアを口に入れずに拳の中や両手の間に挟んで持ち帰ろうとする人がいたら、後を追い、

「失礼ですが、洗礼を受けておられますか？」
と声をかけます。受洗されていないことが確認できれば、
「申し訳ありませんが、聖体をお返しいただけますでしょうか」
と言い、ホスチアを返していただきます。返していただいたホスチアは、自分の聖体拝領のときに司祭に渡します。
ごくまれに、返すことを執拗に拒否される方がおられます。
その場合は、
「聖体はいただいてすぐに食べなければなりません。お返しいただけないのでしたら、今ここで食べていただけますか」
と言い、その場で口に入れていただきます。信徒の拝領が終わる頃を見計らって、列の最後尾に並んで拝領します。

2.2 ミサ終了後

- 内陣への立ち入りを禁ずる札を内陣中央に戻す。
- マイクを香部屋に戻す。
- 献金を香部屋の箱に収め、柄付き献金袋は内陣の左右に戻す(翌日のミサでも使用するため)。
- マイク関連の電源スイッチを切る。
- マイクスタンドとコードを元のように片付ける。

補

聖体拝領時のチェックに関して

哀しい話なのですが、布池教会では不正に聖体拝領に与ろうとする方が後を絶ちません。御聖体は、受洗されていない方にとってはただの焼いた小麦粉ですが、我々にとっては大切な「キリストのからだ」ですので、お返しいただくこととなります。

何故不正な聖体拝領と分かるのか

司祭が聖別した後のパンはイエス・キリストのからだです。ですから、それを汚すこと（汚聖）なくいただくためにはどうすべきか、ということが昔から考えられていました。

現在の布池でもよく目にしますが、自分の手で触れることすら汚聖につながるということで、直接口（舌）でホスチアを受けるといことが行われていました。しかし、1970年に日本司教協議会は教皇庁典礼聖省から聖体を手を受ける許可を受け、それ以来半世紀近くの間、日本では手で聖体を受けることが一般的になっています。

日本カトリック司教協議会の『日本におけるミサ中の聖体拝領の方法に関する指針』という文書には、聖体拝領に関して以下のように書かれています。

拝領者は通常、行列して進み出る。そして、聖体に対する尊敬を表すために、手を合わせて一礼し、聖体を授与する奉仕者の前に立つ。

(中略)

11 聖体を手に受けることを望む拝領者は、本指針 4 に従って、手を合わせて司祭の前に立つ。そして、片方の手のひらを上にし、その下にもう片方の手を添えて両手を差し出す。司祭は聖体を取り上げ、拝領者に示しながら、「キリストの御からだ」と言い、拝領者が「アーメン」と答えると、聖体を拝領者の手の上に置く。拝領者は次の拝領者のために脇に寄り、片方の手の指で聖体をうやうやしく取り上げ、片方の手を添えながら聖体を口に入れ、その場ですべてを拝領して席に戻る。聖体を授与するとき、指から指へ聖体を渡すことは避けなければならない。

ここで重要なのは「その場ですべてを拝領して」という記述です。我々は(何となくかもしれませんが)これを理解して聖体拝領に与っています。ですから、席に戻る前にホスチアを口に入れてしまうわけです。

しかし、受洗していないのに聖体拝領に与ろうとする人にはここが理解できません。我々にとって「いただく = 食べること」に意味のある聖体は、彼らにとっては「何やら有り難いモノ」です。有り難いものはその場で食わず、その後も持っておきたい..... 汚聖という概念も当然ご存知ないでしょうから、結果として彼らはホスチアを持ち帰ろうとしてしまうのです。

彼らはそれを持ち帰った後どうするのでしょうか。どこかに飾って祈るのでしょうか。粉碎して飲食物に混ぜるのでしょうか。あるいは、あちらこちらの教会のホスチアをコレクションしているのでしょうか。いずれにしても、そんなことは彼らにとっても何の救いにもなりませんし、我々にとっても、大事な聖体をそのように扱われるのはあってはならないことです。誰

の幸せにも結びつきません。

実際のケースは

不正な聖体拝領をした方は、ほとんどの場合、握った手の中、もしくは合わせた両手の間に聖体を持ったまま帰ろうとします。おそらく「いけないことをしている」という意識をお持ちなのだろうと思いますが、ホスチアがその握りしめた手の中でくちゃくちゃに砕けていることもあります。「何やら有り難いモノ」を持ち帰ろうとして、罪を持ち帰ることになってしまうのは哀しいことです。

これとは逆に、何ら罪の意識もなく、ただもらいたいからもらうのだ、という方もおられます。こういう方は、聖体拝領の厳粛な雰囲気にも照れを感じるようで、そのためか、いただいた聖体をぞんざいに扱うことが多いようです。声をかけると、逆上して床に投げ捨てたり、踏み付けたりする方もおられます。

親子でまとまって不正な聖体拝領をされるケースもありました。初聖体を受けているかどうか怪しい年頃で、所作もおぼつかないお子さんを司祭が不審に思い「この子は初聖体を受けていますか」と確認しても、親御さんの方が確信犯で「大丈夫です」と言われると、司祭としてはホスチアを渡さないわけにはいきません。こういう場合は、お子さんに注目すると、「これ、もらっちゃってもいいの?」と迷っていたり、逆に「あーなんかもらっちゃったあ」と照れ笑いをしていたりすることが多いです。ホスチアの扱いは概してぞんざいで、子供ながらに「もらってはいけないものをもらってしまった」と感じた結果なのでしょうか、席に戻る前にその辺に投げ捨てていたケースもありました。

ここで強調しておきたいのは、我々がこのような人々を「取締る」べきだということではない、ということです。そもそも我々にはそんな権限はありません。我々にとって大事なことはふたつだけで、

- 聖別されたホスチアは、受洗した信徒にとってはイエス・キリストのからだであり、受洗していない方々にとってはただの焼いた小麦粉に過ぎない。
- そのホスチアを軽々に持ち帰ることは、我々にとっては聖体を汚してしまうことになり、持ち帰る人はホスチアと共に罪の意識を持ち帰ることになってしまう。

ということです。そのために、聖体拝領の近くにいる先唱者は、侍者と共に、その様子をチェックしておく必要があるわけです。